

明日 への 話題

フランスの 無気力と日本



名古屋商科大学ビジネススクール教授
元日本銀行政策委員会審議委員

はらだ ゆたか
原田 泰

1940年5月10日、ドイツ軍は、フランスとの国境沿いの巨大要塞・マジノ線を迂回、ベルギーからフランスに侵入し、パリを目指した。マジノ線を突破されたフランス軍は散発的な抵抗しかできず、ドイツ軍は6月14日にパリに入城した。ほぼ1月の出来事だった。

惨敗の理由として、マジノ線がベルギー国境に延長されていなかった、戦闘機と戦車による集中的な先制攻撃を想定していなかった（1939年9月、すでに始まっていた第2次世界大戦でのドイツとポーランドの戦いから何も学んでいなかった）、フランスの航空産業の製造能力が限られていた、通信システムの不備により戦車部隊を集中的に活用できなかったなどと分析されている（ロジャー・プライス『フランスの歴史』341-346頁、創土社、2008年）。しかし、当時は大恐慌のさなかで、ナチス・ドイツが戦争をすることは分かっていたのだから、戦闘機も戦車も通信機も作ればよかった。マジノ線の延長は最高の公共事業ではないか。

フランスの逡巡と無気力は、フランスの大恐慌からの回復が遅れたことにあるとアンドレ・モーロワ（『フランス敗れたり』ウエッジ、2005年。邦訳原著1940年）は指摘する。不況が長引いた理由は、他の国が金本位制を脱却して大胆な金融緩和を行ったにもかかわらず、フランスはそうしなかったからである。大恐慌が始まる前のピーク1929年に比べて、1938年になっても、フランスの工業生産は25%も下回っていた。一方、イギリスは27%、ドイツは26%も上回っていた（ブライアン・R・ミッチェル編著『マクミラン 新編世界歴史統計 [1]』東洋書林、2001年、より計算）。

フランスが大恐慌からの回復ができていたら、わずか1月でパリを引き渡すことはなかっただろう。不況により、エリートに対する不信と左右の亀裂が拡大し、フランス国民は信頼できないエリートの下でドイツと戦う気力を失っていた。

私は、2012年の日本は、第2次世界大戦直前のフランスのような状況にあったのではないかと思う。強い経済に関心のないエリート、金融緩和による景気の回復に反対するエリート、安全保障上の危機に行動を起こすことを逡巡するエリートが日本を動かしていたからだ。安倍政権はその状況を一変させた。アベノミクスによる経済の回復、安全保障のための同盟の強化と拡大である。